

# エルンストと ルイーゼを偲ぶ歌

渡辺美奈子

(文学博士・ドイツ文学・横浜薬科大学講師) Minako Watanabe

フリードリヒ・リュッケルトは、数多くの言語で翻訳や著述をしながら、それぞれの言語圏の詩形を取り入れ、膨大な数の作品を残した詩人である。愛国的・政治的な詩も数々あれば恋愛の詩も多い。けれども何よりも読者の心を打ち、それによって詩人リュッケルトの立場を揺るぎないものにしていくのは、死後出版された詩集『亡き子を偲ぶ歌』を含む、子どもたちの死を悼んだ詩の数々であろう。リュッケルト生誕200年にあたる1988年に、批判的校訂版の同詩集を編集出版したハンス・ヴォルシュレーガーは、これらの詩を「この世の文学における最大の死の嘆き」と語った。

リュッケルトは1821年、33才で、ルイーゼ・ヴィートハウス=フィッシャーと結婚した。1831年夏に実父が永眠し、1832年はじめに六男カール=ユリウスが生後わずか3日で亡くなるという不幸に見舞われるものの、1833年のクリスマス前までは、ほぼ幸せな日々が続く。後の妻の日記には、「幸福にとても慣れていたので」、神がこのような試練を与えるなど考えもしなかったことが綴られている。

1833年秋、リュッケルトは、親友カール・バルトに、当時の末子で3才のルイーゼ(母と同名。以下「ルイーゼ」は娘を指す)と4才のエルンストの肖像を描いてもらった。間もなく訪れる大きな不幸など、知るよしもなかった頃のことである。



■カール・バルトによる肖像。左がエルンストで右がルイーゼ。

発病の少し前、ふたりの子には、あたかも運命を予感したかのような言動が見られる。ルイーゼは1833年クリスマスイブの2日前、自分が見た夢を母に語った。十万の天使を連れた金の馬車がやってきて梯子を下ろし、その梯子で天使たちのところへと昇っていったという夢である。天使の姿で良い子に素敵な贈り物を持ってくるリストキントの話をもつて聞いていたので、それが夢の誘因になったのだろうと母は考えた。だが運命が一家に与えたクリスマスプレゼントは、あまりに過酷なものだった。

当時唯一の娘だったルイーゼには、聖夜に体調不良、26日に吹き出物等猩紅熱の症状が現れた。呼吸困難に苦しむ娘は、首から酸素を受けながら死闘を繰り返し、大晦日の未明2時半、わずか3年半で人生の幕を閉じた。年明け間もない1月3日、母は幼い身体に、お気に入りだった白い衣装を着せ、母の友人が編んだミルテの花冠で額を覆い、咲いたばかりの赤いヒヤシンス2本を娘の胸に挿す。こうしてルイーゼは、花嫁衣装をまとった天使のような姿で葬られた。リュッケルトは、義父に宛てた手紙の中で「神よ、私たちにこれ以上苦しみを与えないでください」と書いたが、間もなく数日後、今度は息子の闘病が始まるのである。

5才になったばかりのエルンストは、感謝と愛に溢れるかのように、両親の手に何度も唇を寄せたという。娘の死以来身体を壊している母は、間もなく病魔に襲われたエルンストとベッドを並べ、家事を友人に依頼して、できるだけ長く息子と時間を共にした。

猩紅熱の症状に脳炎も加わり、舌が膨らんで、ろれつが回らなくなり、壮絶な苦しみに耐えながらも、幼い少年は母とともに祈り、最期まで両親の声に素直に耳を傾けた。死闘は何日も続いたが、最期は静かに息を引き取ったという。1834年1月16日の明け方3時半だった。その後、他の子らも猩紅熱に苦しんだが、彼らは神の恩寵に守られたのだった。

エルンストもルイーゼも、夜明け前、この世に別れを告げた。空が白み、世が動き出す時に募る孤独な悲しみを、リュッケルトは「今や太陽はこんなにも明るく昇ろうとしている／昨夜の不幸などなかったかのように」と描き出した。マーラーの歌曲集第1曲となった詩である。

この冬を境にリュッケルトの髪は白くなり、元に戻ることはなかった。ふたりの亡き子を偲んで、リュッケルトが半年間に作った数は563篇に至る (Rückert: Kindertodtenlieder und andere Texte des Jahres 1834, Wallstein, S.561)。1日平均にして3篇を越え、その後にも同様の詩が書かれている。一部はリュッケルトの生前、雑誌に発表されたものの、彼は決して詩集を出版しようとしなかったという。『亡き子を偲ぶ歌』はリュッケルトの没後6年経った1872年に出版された。収録されたのは428篇で、その他に、別の詩集に前年の作として掲載された詩もある。一般的な子の死を第三者的に綴ったものも見受けられるが、基本的には我が子の死を悼んで作られた作品である。詩の1節を引用しよう。

きみは 日中は日陰  
夜は灯  
私の嘆きの中に生き  
私の心の中では 死ぬことがない

エルンストとルイーゼの墓には、おそらくリュッケルトが植えた白樺が育ち、そこには、詩「常に私は子どもたちの意思を詩作してきた」第2節が掲げられている。

ふたりは 私によって生を受け  
あまりにも早く その生を失った  
母親が夫のために  
ふたりを生んだのは無益だったのか？  
いや 私は誓った  
きみたちの生を詩作し続けることを  
そうすれば私には  
無益なことなど何もありえない

当時は今より子の死亡率が高かったが、子を失った悲しみは変わらない。それどころか、より多くの悲嘆に耐えなければならず、死別の運命を今よりさらに直視しなければならない時代だったことが理解されるだろう。闘病の末に力尽きた子の姿があるからこそ、どの詩も純粹に、読者の真の涙を誘う。マーラーもおそらく、そうした読者のひとりであった。

マーラーは他のリュッケルト歌曲、および交響曲第5,6番と同時期1901年と1904年に『亡き子を偲ぶ歌』に取り組んだ。第2曲では、詩の第3節後半「私たちはいつもお父さまの近くにいたいんだけど／運命によって拒絶されたの」の「いつも」が削除された代わりに、歌の旋律の間に、語るようなフレーズの器楽が挿入されている。第3曲では、詩集で前後に並ぶ似た内容の詩IIの第1節後に、Iの第1節が、最初の2行をIIと同様に変えられた上で挿入され、再びIIに戻って、その短い第2節で終わられている。むろん音楽的な理由もあるだろうが、マーラーがとりわけ惹かれたと思われる詩や詩句に「時間」が与えられているのである。

1902年、マーラーは結婚をし、11月には娘マリアが、2年後にはアンナが生まれた。歌曲集『亡き子を偲ぶ歌』は、マーラーの幸せな時期に作られたのであった。だが作

曲者にも数年後の1907年、同様の病気で長女を失うという不幸が忍び寄る。幼くして永眠したエルンストとルイーゼには、実父リュッケルトの詩集においてだけではなく、歌曲集『亡き子を偲ぶ歌』の中でも、父と同じ苦しみを負うことになるマーラーの手によって、永遠の生命が与えられたのである。



■マーラーとマリア (1905)